

庭の番人ゝなつゝ

緑・蔭・憩

若葉が、散った花の後を追うようにふえはじめました。つい数日前のような気がしていたのに、どんどん色を濃くしていきます。葉は大きく枚数もふえて、豊かな緑色が太い桜の木と四辺を包みこむように重なりあっています。太陽も強い光と共に暑さもましてきます。生物にとって、なくてはならないもので

土橋 光子

すが、思わず暑いあついの連発と、水分を求めて止まない毎日が続くようになりました。そんなある日、車庫のビニールトタン屋根に、パラッ、パラッという音を聞くと、急に陽が陰ったように感じて空を見上げましたが、変わりもなく、乾いた土と飛び石の縁を蟻が行列して往来しているだけで、雨の気配はあ

りません。今のは何の音？ じっと耳を澄ましている、やはり小さな音がします。その日はどうしても解らなかつたのですが、出先から帰ってきた娘が、ちょっと身ぶるいして、

「ねえ、そろそろ毛虫の季節ね！」

あつ、あの音です。立派でおいしそうになつた桜の葉っぱは、毛虫たちにとつても大したご馳走なのです。昨日のあの音は毛虫の排泄物、そう糞です。樹上から落ちてきてトタン屋根をならしはじめたのです。

この落下物のはじまる少し前頃から、枝をはり緑の濃くなつた桜の木蔭は往来する人々が、ほっとひと息する憩いの場所となっていました。私なども町を歩く時、少しでも日射を和げてくれるような木蔭の多い細い道をと、ちょっと遠廻りしてしまいます。

桜の木は庭の隅で五十歳の誕生を迎えました。少し枝も切られましたが、大木になりました。アスファルトの道にせり出してちょっと一息いれる格好の場所になつたようです。目的地を目の前にして、木蔭で汗を拭き、ほっとしている様子を見ると、やれやれといった感じが伝わってくる光景を見るのも同じ頃です。

この頃になると子ども達の登校時間が少しずつ早くなつてきます。そんな或る日、ワアワア泣いている幼児と何か言っている母親の声に、ついきき耳をたててしまいました。

「そんなに泣くと、毛虫が落ちてくるよ！」

「ワア！」

そのとたん前より大きな声になり、私の胸はきゅっと痛くなつてきました。幼児も毛虫も迷惑なことだろうなと思つたのです。各々

に理由があつて泣き、毛虫もそこにいるので
す。幼ない人の泣くわけは、他にあつたので
しょうに、もう一つ毛虫が加わつて大きくふ
くれあがつてしまったようです。遠ざかつて
いく声と、頭上を見上げながら、誰にともな
く気の毒で、「ごめんね!」とささやいてし
まいました。

以前、植木屋さんに毛虫退治の相談をした
のですが、おじさんは「椿の毛虫は抜殻に
なつても、触るとか、せて大変だが、他のは大
概だいじょうぶだ。大発生しないかぎり、木
が丸坊主になる程、喰つちまわないよ!」と
笑われたことがあります。でも私として
は、願わくば緑蔭で休んでいる方々の上に、
ポトリなんておちないでね、と頼みたい気持
ちです。椿の葉は厚くて雨上りなど実にご
とな緑色を陽に光らせているのを見ますと、

これを好んで喰べる毛虫が害虫とは、何と皮
肉なこと、青虫も毛虫も自分の好きな葉を精
一杯たべて成虫になるのです。あげは蝶を卵
の時から飼つたことがありますか。親が生み
つけた木の葉だけを喰べて成虫になります。

今年の夏、鉢植えの小さな山椒の葉に幼虫
を発見しました。小さい夏こ、蛹で越冬し来
春、蝶になります。なんとも小さい青虫で
す。堅い山椒の葉まで喰べつくしても冬は越
せないでしょうと思うほど瘦せています。考
えた末に、隣りの細い山椒を木ごと近づけて
見ました。そしらぬ顔、根くらべとはかり待
つこと数十秒でやつと移動開始です。変色し
かけた葉まで喰べ尽して、翌日引越しまし
た。蛹になるのに丁度よい場所を捜しにいっ
たのでしょう。鳥や小蜂に見つからないとい
いですね。春には優雅な姿を見せてほしいの

です。

日本は他の国々よりも四季がはっきりしていて、その季節にだけ見せてもらえるドラマが目の前に繰りひろげられます。これらを持つがままに受け取って、子ども達と共に汗を流し、涼をとり、自然が送ってくれるサインを受け止めて、何を語りかけているのか考えとらえ、思いをこらして活動してゆきたいものです。

人が生きてゆく道程に、神は自然を造り、一匹の虫、一本の木や草の中にその生き様を組みこんで、私達の側において教えていられるのだと思います。気づいて受け取っていかれるようになりたいものです。自分に触るところから始めてみませんか！それが普通なのだと思いませんか！それがないで、何故ここにあるのか、どうなっているの、どうしたらいい

の、何の役に立つの、私は何をしたらいいのか等私も一杯考えてしなければならぬ事が山程あります。それは瞬間でもありません、また永遠につながっていくものだとも思いません。

ときには緑を見つめ、木蔭で休ませてもらいましょう。疲れた眼や心を癒し、ひと時の憩いの場所を貸してくれると思います。このようにやさしく、大切な緑蔭をなくさないように、心にとめて守り育てたいのです。

『木を植えた人』^(註)きつとお読みになったと思います。老農夫が永い年月をかけて、荒地に実を植えつづけ、その実はずっとずっと後で森をつくり、村には豊かな泉が湧き生命を甦らせ、幸を賜ってくれたのです。

私たちも今みることができなくても、時を選んで種子を播き、木を植えていきたいもの

です。五十歳の桜の木も人差指くらいの際にこの庭の隅にきたのですが、枝を一杯にひろげ緑蔭をつくるようになりました。木蔭で昔話を伝えていくこともできるほどです。

根元には代替わりの時の為に毎年ほそい新芽も顔を出します。落ち葉を集めた穴からも

落ちた実から二葉をつけた赤んぼ桜が時のくるのを待っています。

(元・武蔵野相愛幼稚園)

〔注〕『木を植えた人』ジャン・ジオノ著

原みち子訳 こぐま社

